

山形大学附属博物館報31

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2005. 3

目 次

2004年10月23日の文化財……………	元 木 幸 一 (1)
「一字一石経」物語……………	三 上 喜 孝 (2)
公開講座草創期の思い出 Information Desk……………	(3)
資料紹介 小塚義一郎《加茂港》……………	(4)
平成16年度事業報告……………	(6)

2004年10月23日の文化財

館長 元 木 幸 一

はて何の日付だろう。最近のことだから、いくら物忘れが激しくなった現代人とてかなりの方はお分かりになるだろうと思う。

この日の夕方、われわれ附属博物館スタッフは、講師の方々、受講生の皆さんとともに、3週連続の公開講座「商いの博物学」を終え、気分良く打ち上げをしていた。と、突然不気味な地鳴りがして部屋が大きく揺れ始めた。新潟県中越地震だった。あわてて、まず一人、つぎにもう一人、そして最後に私と別々に展示室に駆け込んだ。小博物館とはいえ、最近指定されたばかりの山形県重要文化財195点を含む貴重な資料を収蔵し、しかも地震への対策は、昨年度収蔵された川崎繁夫作《閃光》の台座以外皆無（この台座は、学長の特別なはからいで免震台になった）。重文指定された縄文土器の類は、普通の木造枠ガラスケースに入っているだけ。なんの特別な転倒防止策も施されていない。

やばい！と思った順に、展示室に駆け出したわけだが…そうすると、わたしが一番危機意識が鈍感だったということになる…、奇跡的に無事だった。何一つ倒れているものはなかった。70センチ近い高さの大きな尖底土器もあっただけに、ほんとうに奇跡といっても言い過ぎではないように思えた。

その場は何事もなかったもので、4月から新潟県上越市の博物館に勤め始めた前職員を心配しな

がらテレビを見ていたのだが、その後何度かの余震に替える度に、わが博物館の地震への無防備さへの不安がつのっていった。今回は誠にラッキーだった。しかし次は？という不安である。

今回の地震では、新潟県では国宝の縄文土器が破壊されるなど大きな被害を被った。阪神大震災以降、わが国で開催される展覧会に海外から出品される美術品の保険料は大幅アップしたと聞く。国立西洋美術館は建物全体の対震装置を地下室でわざとらしく見せている…もちろんこれには、作品を貸し出してくれる外国の美術館関係者へのアピールの意味もあるに違いない。つまり地震が来ることがほぼ確実なわが国の場合、耐震性をどの程度考慮しているかが、各博物館・美術館を評価する基準の一つになっているのだ。

とすると、唯一の免震台しかない我が附属博物館への評価は、推して知るべしである。地震の専門家を学内に抱える我大学としては、現状はいささか恥ずかしいレベルと言わざるをえないのではなかろうか。博物館の地震対策は緊急を要し、深刻さを増している。壊れてしまったからでは遅いのである。修復家たちに、むごむご修復費を払うくらいなら、その前に耐震装置に払った方がよほどましではあるまいか。というわけで、耐震用の設備を早急に進めたい、いや進めなくては、と思う次第である。大学の財務担当の方々のご理解を深く願う。自戒をもこめて……。

「一字一石経」物語

山形大学附属博物館学芸研究員 三上喜孝

大学で日本史を勉強するようになって、「身震いするような発見」に立ち合った経験が、これまで三回ほどある。

その一つは、大学二年の時である。考古学研究会というサークルに入っていた私は、大学一年と二年の夏休み、山梨県塩山市くろかわきんざんの黒川金山の発掘調査に参加した。「参加した」というよりは「連れて行かれた」といった方が正しい。黒川金山とは、武田信玄の隠し金山といわれた金山遺跡で、隠し金山のいわれのとおり、多摩川の水源地近くの山奥深くに存在していた。私たちは山にテントを張り、そこから毎日片道30分もの山道を登ったところの発掘現場へ行き、1ヵ月近く調査を行った。電気もガスも水道もない、過酷な現場であった。

私たちのサークルが担当した発掘現場は、金山遺跡そのものではなく、同じ山の中にある礫石経塚れきせききょうづかだった。礫石経塚とは、手のひらにのるくらいの小さな石に、墨で經典の一字を書き、それを塚状に積み上げたものである。一字一石経いちじいっせききょうともいう。經典に使われている文字を一字書くことが、功德や供養につながるのであろう。

もともと経塚とは、平安時代中期の末法思想の流行にともない、お釈迦様の教えを後世に残すために紙の經典を銅製や陶製の経筒に収め、山中に埋めたことにはじまる。江戸時代になると、手軽な石に經典の字を一字ずつ墨書して塚を築くという礫石経塚が全国各地で作られるようになり、経塚は様変わりする。庶民の信仰の一つとして変化するのである。

礫石経塚の遺物は、そのすべてが礫石経である。つまり単なる「石」である。それが何万個と積み上げられているのである。それらを一つ一つ地点を確認しながらとりあげ、とりあげた遺物を山から運び出す作業を毎日くり返す。毎日、石を何百個も担いで山を下りることになる。その作業は奴隷の労働に等しかった。結局、調査期間内にすべての遺物を取りあげることにはできず、経塚全体の4分の1でいどの1万3000個ほどをとりあげるとどまった。

東京に戻り、今度はその分析作業にとりかかる。

石にどんな文字が書かれているかを一点一点観察する。たいていは「仏」「法」「是」「世」「念」「無」といった、經典に頻出する文字が書かれている。これらの文字がどのくらいの頻度であらわれているか、などを統計的に処理する。気の遠くなるような作業だ。

ところが、運び出した礫石経の中で、1点、他と違うものがあった。他の石にくらべて、やや大きめの石に、一字ではなく、複数の文字が書かれている。いわゆる「多字一石経」である。欠けている部分もあるが、一面に「為利□ □□自□ 街賣女色 如是之人皆」、もう一面に「勿□險 種種□□戲 盡勿親近」とある(□は判読不明部分)(図)。

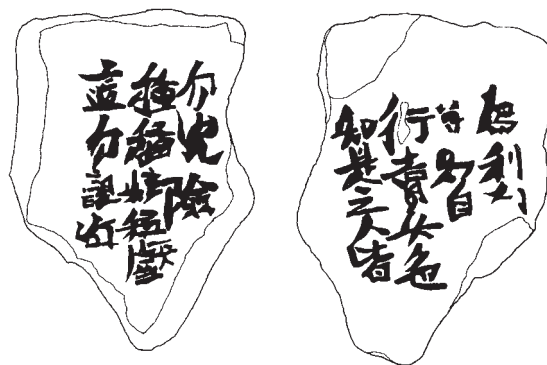


図 黒川金山遺跡出土の多字一石経

これはひょっとすると、經典の一部を抜き書きしたものかも知れない。もしそうだとすれば、この経石の出典を明らかにすることができるはずだ。

誰かが『法華経』あたりの一節じゃないか?と問い出した。私はさっそく本屋で岩波文庫の『法華経』全三巻を買い、最初からめくってみた。すると…、あった!あった!ありました!『法華経』巻第五、安樂行品第十四の中に、「為利殺害 販肉自活 街賣女色 如是之人 皆勿親近 狂險相撲 種種嬉戲 諸淫女等 盡勿親近」という一節があり、経石の文字とほぼ一致しているではないか!これを見つけたときは、思わず身震いしてしまった。今から思うとたいしたことではない。インターネットが普及している今なら、検索をかければすぐにみつかるのかも知れない。だがこれは16年も前の話。本をめくって探すより他に方法がなかったのである。

いずれにしても、この礫石経の出典をめぐるさ
さやかな発見は、私にとっては研究者を志す大き
なきっかけとなった。

山形大学附属博物館に立ち寄ってみるがよい。
片隅にひっそりと、山形県内で発見されたとされ
る一字一石経が展示されている（写真1）。私は



（写真1） 一字一石経

この展示ケースの前に立つたびに、あのときの「発
見」のことを思い出す。そして展示ケースの中
には、一字一石経とならんで、やや大きめの石に複
数の文字を記した「多字一石経」も並べられてい
る（写真2）。私はいつか、この経石の出典をつ
きとめたいと思う。



（写真2） 多字一石経

さて、それから十年後、研究者の道を歩むこと
になった私は、さらなる「大発見」に遭遇するこ
とになるのだが…。それはまた、別の話。

〔参考文献〕

『甲斐黒川金山』（黒川金山遺跡研究会・塩山市・塩山
市教育委員会、1997年）、今村啓爾『戦国金山伝説を掘る』
（平凡社選書、1997年）

（人文学部 助教授）

公開講座草創期の思い出

Information Desk

山形大学附属博物館が初めて公開講座を実施し
たのは昭和56年、今は故人となられた川副武胤館
長の時代であった。あれから20年余が経過して、
昨今の公開講座事情を考えるに隔世の感がある。

当時、学内で定期的に公開講座を開設している
学部はなく、定員の教職員も独立した建物も持た
ない博物館が公開講座を企画することなど冒険を
通り越して「無謀だ」という声が関係者の中にも
あった。しかし、そんな危惧を押し切ったのが川
副館長の「こんな博物館だからこそ始めることに
意義がある」という一言であった。

さて、ともかく公開講座開設が決まったものの
何から手をつけていいものやら、暗中模索の日々
が始まることとなる。

学部の附属ではなく全学の附属施設であるとい
う利点を活かし、講師は各学部から広く集め、当
時の時世を反映し、テーマは「生活とエネルギー」
という大筋は決まったが、なにぶん初めての経験・
仕事であり、「じゃあ次はこれを」がまったく思
い浮かばない。それどころか開催期間が毎週土曜
日計8回と決定した時点で、担当の私は気が遠く
なっていたのが実情であった。今のように週休2
日制ではなかったものの、半日勤務で終わってい
た土曜日が連続して8回も全日勤務になるという
ことは私にとっての大問題であり、準備段階の時
点では正直「犠牲」という悲壮感があったことは
否定できない。

開催期間が決定し、いよいよ講師陣を決定する
段になると、1回につき1コマ120分ずつ2名の
講師を探し出すことは容易ではなかった。当時の
学芸研究員・運営委員等の先生方に無理をお願い
し、歴史分野の先生に「日本における燃料の歴史」、
美術分野の先生からは「西洋美術におけるエネル
ギー表現」という苦しい演題を捻出していただい
たことなど、懐かしくも申し訳なくも思い出され
る。

川副館長のご尽力もあり講師陣14名が決定した

のは公開講座受講者募集開始の直前であったと記憶している。講師陣の中には現在故人となられた方や職を退かれ名誉教授となられた方、他大学に転出された方もいらっしゃり、現職で大学に残っていらっしゃるのには工学部・梅宮教授お一人、ここでもまた20年余の歳月を痛感させられる。

また、当時の広根徳太郎学長に講師をお願いし、お引き受けいただいたことは、今思えば暴挙でもあり快挙でもあった。金属物理学を専攻されたエネルギーの専門家とはいえ、一施設の公開講座へ学長自ら講師としてご参加下さったということは、公開講座開設の意義と重要性を認知していただけたのであろうと自負している次第である。

現在乱立している県や市町村レベルの公開講座や講演会も当時はほとんどなく、県内各大学等の催し物も少なかった昭和56年、受講者は県内外から84名に及んだ。大学の附属施設とはいうものの、ほとんど知名度のなかった博物館としてはまったく驚異的な数字であり、「開かれた大学」を切望する一般市民の方々の熱意と意欲を見せつけられる思いがしたものだ。

すべての講義終了後に学内の食堂で受講者と講師陣による懇親会を行ったが、会費300円でのお菓子を囲んだ茶話会であったにもかかわらず、途中席を立つ方もなく、延々2時間以上のにぎやかな会となった。

「こんな近くで学長とお話できるなんて・・・」と広根学長にサインを求められる方

「せっかくの機会なので」

と講師に講義中の疑問を質問をされる方、

「大学の建物内に入ったのは初めてです」

と会場の中をしげしげと見回す方。

卒業式後の謝恩会を彷彿させるようなひとときであった。その時の受講者の多くの方が、この後の山形大学公開講座の常連として定着して下さったことはいうまでもなく、次年度あたりからは他学部の担当者から講座開講のためのノウハウの指導を依頼されるまでになり、土曜日が無くなったことの悲壮感など、この頃にはすっかり何処へか飛んでいってしまっていた。

ここまで公開講座草創期の思い出をたぐって

るうち、自分の記憶力に不安を感じ、工学部・梅宮教授に電話で当時の思い出をうかがってみた。

「公開講座という言葉も今ほど一般化しておらず、研究の地域への還元という意識も少なかった昭和50年代に、予算の後ろ盾も持たぬ博物館が公開講座を開講しようという関係者の心意気と熱意に賛同して講師を引き受けたんでした。まさしく山形大学公開講座のパイオニアですよ。」

博物館への思いやりが多分に含まれたお言葉とはいえ、担当者にとっては有り難いお言葉であった。

昭和56年以来、博物館主催の公開講座は毎年確実に回を重ね、平成17年度に23回目を数えようとしている。平成17年度は工学部との共同開催で博物館としては初めての米沢地区での開講を計画している。新しい試みを成功させるべく初心に戻り、人集めだけでは終わらない受講者に喜ばれる公開講座を実施していきたいと念じている。

(附属博物館 高橋加津美)

資料紹介

小塚義一郎《加茂港》



1931年 油彩 33.0cm×42.0cm

今回ご紹介させていただくのは小塚が昭和6年(1931年)に描いた《加茂港》である。絵の裏側には「昭和六年八月 湯ノ浜街道 夕景」とペン書きでの記入がある。加茂港は鶴岡市にある日本海に面した港である。画面の左側には大きくそそり立つ岸壁がどっしりとあり、手前の方から海岸に向って波が押し寄せている。画面の大部分を占

める岸壁と波、山の影から湧き昇ってくる入道雲はほんのりと赤みを帯び、中央に小さく見える笠をかぶって働く二人の人物の顔は夕日で朱に染まっている。また日が暮れたら二人が帰って行くであろう右側に描かれた家並みも夕日に照らされている。二人の後ろに見える山は高館山だろうか。下から上に向かって勢いよく運ばれた緑の筆跡は木々の生命力を感じさせる。そしてそのような木々の勢いに押し上げられるように入道雲が天に湧き昇っている。本館が所蔵するもう一つの小塚の作品《小砂川海岸》は《加茂港》を描いた翌年に描いたもので、こちらも海沿いを描いている。また山形美術館が所蔵する《今泉海岸》は《加茂港》と同年に描かれたものだ。この時期小塚は日本海側を頻りに訪れていたのだろうか。

ここで小塚という人物について紹介したいと思う。小塚は明治21年(1888年)に静岡県に生まれ、東京美術学校図画師範科に入学し、岡田三郎助や小林萬吾に師事している。そして大正11年(1922年)に本学の教育学部(2005年4月より地域教育文化学部となる)の前身である山形師範学校の美術教師として山形へとやってきた。郷里へ戻るまでの17年間、彼はこの地で洋画の指導を行うこととなる。期を同じくして山形工業学校(現在の山形工業高校)へ図画教師として赴任してきたのが為本自治雄であった。小塚は為本を誘い、この地方で初の公募展を主催した〈毒地社〉を結成する。創立メンバーの中には後に美術批評家となる今泉篤男などの名も見られ、この頃から第一次大戦後の不況でなりをひそめていた山形の美術界は活気を取り戻し始めるのである。

第一回毒地社展は山形市役所二階を会場とし、小塚と為本が山形へ赴任した年と同年の大正11年9月30日から10月2日までの三日間開催されたが、大盛況だったようである。応募は200点以上あり、小塚らが審査を行い69点が入選となった。展覧会用のポスターはメンバーが日本紙に油彩画をほどこし、羅紗紙に貼り付けるというような方法で製作した手の込んだものだった。山形市内の商店の店頭に貼らせてもらっていたが、会后このポスターを譲って欲しいという店が数店あったという。創立メンバーの一人である奈良村正史は『山形の美術』で「陳列は師範美術部員、山形高校、

工業校からなどの多くの学生諸君がよろこんで応援にかけつけてくれ…(以下略)」と当時の様子を振り返っているが、初の公募展に胸を弾ませ色めき立つ山形人の様子が窺える。以後、時には米沢市出身で岸田劉生の弟子としても知られる椿貞雄などを迎えながら毒地社展は昭和3年(1928年)まで毎年開かれることになる。

このように山形の美術界を盛り上げた毒地社の活動に刺激を受けて各地に美術団体が結成され始めるが、各団体の会員には毒地社出品者の誰かが必ずいるというような状況であった。この事実からも毒地社が山形の美術界に与えた影響の大きさが窺い知れよう。毒地社は後に官展派の小塚と在野派の為本の目指す方向性の違いから分裂することとなるが、これはお互いに新しい発展を求めた結果であった。小塚は山形師範学校卒業生を中心とした県内学校の美術教師らと〈向陽社〉を結成し、毒地社の活動は終わりを迎える。

毒地社展時代、小塚の作品は椿貞雄から「筆が乱暴である」と批評されたことがある。この時の小塚の作品がどのようなものであったかは不明である。しかし《加茂港》は筆は乱暴かもしれないが、その筆遣いが全体的に海沿いの町の暑い一日の終わり、夏の終わりの最後の勢いを感じさせる面白い作品であると言えよう。

主な参考文献

- ・山形新聞社・山形県美術連盟編集『山形の美術』、山形新聞社、1964年
- ・山形県芸術文化会議編集『山形県芸術文化史』、山形県芸術文化会議、1973年
- ・村山鎮雄「峠の美術往来 山形・〈毒地社〉の人びと」『繪』、日動画廊、1987年11月号～1988年3月号

(附属博物館 軽部 早苗)



平成16年度事業報告

平成16年度に本館で実施した**博物館実習**の単位
修得者数は下記のとおりです。

(単位：人)

区 分	1 回 目 8.17～8.20	2 回 目 8.15、16、 17、21	合 計
人文学部	25	15	40
教育学部	9	25	34
理 学 部	20	4	24
学 外 者	1	2	3
合 計	55	46	101

公開講座は「商いの博物学ー古銭からマネー
ゲームまでー」をテーマに開講されました。**講師・
演題**は下記のとおりです。

第1回	10月9日(土)	1コマ 各90分
・ヴァトーの〈ジェルサンの看板〉 山形大学 助教授 阿部成樹		
・金勘定をする人 ーヨーロッパ中世の商人たちー 山形大学 教授 元木幸一		
第2回	10月16日(土)	1コマ 各90分
・墨客商売 ー文学で飯を食った江戸の戯作者と版元ー 明海大学 教授 山本陽史		
・海を渡ったお金、地下に埋もれたお金 ～中世渡来銭、ふしぎものがたり～ 山形大学 助教授 三上喜孝		

第3回	10月23日(土)	1コマ 各90分
・紅花商人の経営戦略 山形大学 教授 岩田浩太郎		
・投機と信用文化 ーヘッジファンドをどう使うかー インベスターセレクト アドバイザーズ 関村正悟		

特別展は、平成16年11月8日から19日までの平
日の10日間、「江戸時代の商い」と題し、附属図
書館の会議室を会場に開催した。

平成15年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	543人
	団 体	338
大 学 生	個 人	1,576
	団 体	295
児 童 ・ 生 徒	個 人	7
	団 体	309
合 計	個 人	2,126
	団 体	991
	総 数	3,117

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用してい
ただけるよう、協力体制を整備しています。
お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報 No.31 2005.3発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12
(TEL) 023 (628) 4930 (直通)
(FAX) 023 (628) 4930
<http://klibs1.kj.yamagata-u.ac.jp/museum/>